

足立コンシェルジュ養成講座第1回記録

主催：足立ほがらかネットワーク

日時：平成21年12月6日（日）午後1時30分～4時30分

場所：足立区郷土博物館

講師：足立区郷土博物館学芸員 多田 文夫

参加者数：一般10人、会員14人

はじめに、添田会長から足立ほがらかネットワークの活動内容等について説明があった。

引き続き、足立区郷土博物館学芸員多田文夫氏から「足立の成り立ちと地域特性」について講演が行われた。途中で休憩をはさみながらフィールドワークとして中川周辺や佐野いこいの森を散策した。また、多田学芸員の説明を聞きながら足立区郷土博物館の見学をした。

講演の内容については以下のとおりである。

どうも皆さんこんにちは。今日はようこそ手前共の郷土博物館を会場にして頂きました。今日は先程添田さんの方から足立コンシェルジュ、最初聞いたときに、何のことやらわからなかったのですが、ご案内なさる皆様を養成する講座だというふうに伺いました。今回全部のトータルしたカリキュラムを拝見しましたら、最初に私も歴史とか、地域の特長なんかを学んだあと、いろんなことをやって、足立の案内人と言って宜しいんですか、そういう皆さんの活動をやっていきたいんだ、そういう話を承って、二つ返事でうけたまわってしまった。という次第でございます。

今日皆様のお手元にレジュメ・プリントを配付させて頂きました。ご確認くださいませでしょうか、こういうA3版になっていると思いますけれども、「足立の成り立ちと地域特性」というプリントです。皆様のお手元には両面のプリントになっておりますのを、皆様ご確認頂ければと思います。5時までという非常に長い時間の濃い講座だと伺っておりますので、どうか、博物館にいただけではなくて、折角ですからフィールドワークをしよう。ということで、いくつかコースをご用意しております。ということで、最初に今日のだいたいの予定をもう一度確認させていただきたいと思います。今からだいたい2時30分まで大体1時間ばかり、江戸時代までの話のことについて少しお話をさせて頂きまして、1時間経ちましたら10分休憩して、行きたいと思います。どこに行くかといいますと「佐野いこいの森」というのがこちらの近所でございます。そちらの方まで行きまして、町の特徴が現れるものがいくつかございますので、それを皆さんと一緒に見ていきたいと思っております。そして、今日回られるところなんかから出て来たものが、常設展示にも反映されておりますので、その辺りを皆さんとご一緒に見学をして、最後にまた現代部分を確認してディスカッションをという流れが一番いいのかなと思っております。

今日フィールドワークというものを入れさせて頂きました。フィールドワークですね。何か聞き慣れない言葉かもしれないんですけども、今日これを入れたのはコンシェルジュ養成講座だと伺ったからであります。似ているものに私共博物館でやるものに史跡巡りというのがあります。史跡巡りとフィールドワークとはどういう違うがあるのかということになるのですが、この二つの一番の違いは、こちらの方（史跡巡り）はかなり受動的で、参加者の視点から見ると受動的な授業になります。それで、こちらの方（フィールドワーク）は何かと言うと、調べた上で、実際現地に行って新たな発見がありますよ。いろいろなものがありますよ、というのを見つけて、自分で再構成してまたフィードバックしていく。研究とか、皆様のご案内のスキルとかにフィードバックしていくといったような、やり方の違いというのがございます。今日は敢えて、フィールドワークというふうにうたわせていただきました。史跡巡りですと、例えばと50人100人、大きな人数で史跡のポイントポイントを歩いて行って、そこで解説者とか案内人がへたをすればメガホンで、ここはこういう場所でございます、という場合にやるタイプでございます。こうやって簡単なんですけども、コンシェルジュをやる皆さんにとっては、自分達が聞けばっかりというのはあまり面白いものでもありませんし、新たな知見が広がっていくわけでもございせんですね。フィールドワークだと町を歩きながらいろいろなものが見えてくる。例えば案内人の方であれば、この町をどう案内しようか、この地域をどのように伝えようか、ということを考えながら見ていくと、新たな発見というのが必ず出てまいりますので、そういった意味で、今日は解説の内容についてはこちらで用意させて頂きますので、言ってみれば模擬というか練習なんですけれども、そういったところで皆さんの今後のご案内のスキルアップに役立てればいいなというふうに思って、佐野いこいの森の方まで、後で歩いて行きたいと思います。先方の佐野いこいの森の方のスタッフにも今日声を掛けてありますので、お楽しみにということになろうかと思えます。因みにこの辺りに来たことがある、という方がいらっしゃいましたら手を挙げていただけますか。結構いらっしゃいますですね。有難うございます。たぶん足立区の東の端っこで、えらい交通の不便な地域にあるのですが、いらして頂いて有難うございます。二度三度いらっしゃった方もあるかもしれませんけれども、あわせてその時のまた新たな知見が皆さんにできればいいなというふうに思っております。つい先だって私、幾つかの他の大学とかで講義をやっているんですけども、学生さんと一緒に町を歩いたり、一回は千住でやらせてもらいました。そこでも町を見て例えば千住宿といわれているけれども、江戸時代の名残ってどれ位在るんだろう。というのを視点にしながら回ったんですけども、それでもさすがに学生さん達いろいろなものを見つけて来ます。それを大切にして今後の研究に役立ててね。なんていうような授業をやったりするんですけども、ここでも、より深い方々でございまして、変な話で4年生の大学よりも話していて濃いですよ。最近のこういう一般的な講座というんですか、社会人の皆さんが参加される講座というのは、非常に話している方としては、打って響いてくるので凄く楽しいんです。若しかして高等教育機関というのは、大学ではもう

無くなっているのではないかと、そんなふうに思うこともしばしばでございます。御託を並べているよりもさきに、足立の歴史・地理の視点からみた時の特長というのを、一本だけに絞りました。幾つかあるんですけども、一本だけ絞って、水をめぐるところから、話に入っていきたいと思います。

「歴史地理の視点で見る足立区のようにすと地名由来」というタイトルを付けさせて頂きました。プリントの方に白黒で恐縮なんですけれども、このスライドを全てプリントしてありますので、ご覧いただきたいと思います。

最初にですね。よく足立区は海だった、という話をされることが多いんですけど、まさにその通り、足立区は最初の頃は海だった時代がございます。2万年位前だと海がずっと引いた時代がございます。非常に寒い時代でございます。間氷期なんて呼んでいますが、その頃は陸地でございます。ただ実は、2つの川の合わさった所、古利根川と古荒川といわれるんですが、その合わさった所が足立でございます。変な話で、東京湾に行く前に2つの川が合わさる、ベタベタな所、一番土地が低くなっている所に足立は位置しております。その後、縄文時代に温暖化が進みます。現在も温暖化が進んでおりますが、縄文時代って今よりもずっと暖かい時代、平均気温で4度くらい上がっていると言われております。縄文時代になりますと、温暖化の時代、まさに私達のご先祖さんは経験してまして、非常に暖かくて海水面がぐっと上がった時代でございます。それがだいたい5千年くらい前になるんですが、●12秒位欠落●弥生時代の前半頃までは、関東地方の奥深くまで海が入り込みました。陸地だったところがだんだんと浸水し、徐々に水没して足立の殆どが海の底に沈んでしまった時代です。このまま温暖化が進みますと、いずれはまた●●皆んな底に沈んでしまうのかな、歴史は繰り返すではございませんけれども、既に一度人が住み始めてから、この辺りが水没した時代というのがございます。千住で、当館で収蔵しているんですけども、足立学園という学校がありますけれどもあそこの校舎建て替えの時に出て来た鯨の骨なんていうのが、今も伝えられております。他にも水生植物だとか遺物も残っていて、本当に嘗ては海だったんだなというのが良くわかる土地です。その土地にずっと土砂が堆積して陸地化していくのが2千年くらい前、もう有史時代もいい所でございます。足立区もいってみれば海底から上がってくると、そういう時代になってまいります。昔海だったといわれるのはその通りでございます。その影響というのが、水の環境に非常に反映しております。一つご覧いただきたいのが、感潮域というものがございまして、皆さん聞いたことがございませんでしょうか、感潮域とか感潮区間、要するに潮が上がってくる場所でございます。綾瀬川でも荒川でも隅田川でも、荒川は殆ど見えないのですが、隅田川や綾瀬川、そして館のすぐ近くを流れている中川でも見られますが、水が殆ど流れていない、若しくは下流部から上流部に向かって水が流れているという様子をご覧になったことがございませんですかね。千住大橋の袂なんかに行きますと、潮の香りがプーンとしてくる時があるかと思えます。中川では実は上流の吉川橋という所まで潮が上がります。荒川ではもう埼玉の秋ヶ瀬という所まで潮が上ります。ちょっと遠くなります

が、江戸川でも野田橋という所まで潮が上っていきます。つまり海の水が入り込んでいる場所にこちらの方位置しております。何でこんな話をするかという足立区は水に存外苦勞しております。歴史上ずっと苦勞しております。水害で苦勞する水の苦勞ではないんですね。農業をやろうと思っても、目の前に川があるのに使えないという状況が長く続きます。最後にフィールドワークの時に出てきますが、葛西用水というのが当館の前に復元されて流れております。見沼代用水なんていうのが舎人とか古千谷とかあちらの方に行くところがございます。あの用水、水源を何処に求めているかと言うと利根川、上流の利根川から真水を引っ張ってきています。何でまたあんなに遠い所から水を引っ張って来なくてはいけぬのか、一つの地理的な特徴です。足立区だけではなくて、葛飾区、江戸川区いずれもそうです。この辺りの目の前の川というのが農業に使えないという、そういう特徴がございます。海の名残がまだ残っているといえればそれまでなんですけれども、農業用水に使う為には下流からの潮汐を遮断しなければいけない。潮が上がってくるのを止めてしまわないと農業用水を確保できないという、そういう地域的な特性があって、その為いろいろな町の特徴にこれが影響してまいります。一つ次にご覧頂きたいのですが、今日実際に現地に行ってみようと思っておりますが、中川です。現在博物館から歩いて、私も昼休みなんかたまに行ったりするのですけれども、時間帯によってはもうヒタヒタになって、下流に行く様子が見えません。水がただただたゆたっている、下流に流れていないよという、丁度満潮の時なんかそうなるのですけれども、干潮になると川なんですけれども、もう水が溜まってしまっている。という所がございます。暫く中川上流の方に参りますと潮止橋なんて橋がございます。まさに文字通りでございますして、潮が上り止る所に、潮止という地名がついて残っているという、そういう特徴がこの辺りにございます。

それでもって、ではどうするんだということになるんですが、もしお時間がある方がいらっしゃいましたら、八潮の方にですね、葛西用水をずっと行っていただきますと、圀川という川がございます。昔は小溜井と呼んでいたところなんです。場所は今日はプリントの一番最後に地図を付けてございます。足立区全体の地図なんです、久左衛門新田小溜井、古川溜井という場所を見つけていただけますでしょうか。二つ書いてあるのですけれども、葛西用水を挟んで東西に、これは元々の綾瀬川の本流なんですけれども、これを締め切って溜井、要するに農業用の溜池にするということを昔の人はやっています。綾瀬川流路を使いながら、それを溜池にして、そこから農業用水を取ると、そういう工夫をしたりしております。また、もう一つは先程も申しました見沼代用水、葛西用水なんです。千住の方までずっと行くあの用水です。見沼代用水の最下流は千住になります。一番下の方は、利根川から水を引っ張って来る。そういうことをやって農業用水を確保する、ということがございます。この水をいっぱい使うというのはお米を作るというのがこの辺りのもともとの特徴で、後で出てまいります、稲作地域だったということが前提になっております。こういう具合に水一つ取ると足立のことが良く見えて来るんですね。水をとる為に、一人の人が取るわけではございませんで、千住の人達が取る、いわゆる竹の塚の人達

が取る、誰が取る、彼が取るということになります。目の前の葛西用水の幅を見て頂くと、当時の用水幅よりかなり広いんですけども、せいぜい幹線水路から、綾瀬川より東の方は殆ど灌漑されていると思われると、この辺り一面がもし水田であれば、誰が何時どれだけの時に水を取ろうか、これ相談と争いが大変絶えません。その名残ではないんですけども、町同士の話し合い、繋がりというのが非常に濃い地域でもございます。社会学の先生と一回、話をしたことがあるんですが、葛飾よりも村らしいですね、変な言い方なんですけど、地域的な繋がりというのが、今の現代社会を分析しても葛飾区よりもよっぽど農村らしいと。古いタイプが残っている。町会という組織がございまして。私も梅島三丁目に住んでおまして、島根町会に入っております。町会に入っていると凄くよくわかるんですが、あざなえる縄の如く人間関係が積み重なっております。町会を軸にして、やれ青少年委員だ、学校のPTAだ、何とか委員だ何とか委員だ、この社会構造たるや、もしかしたら江戸時代に行って来てみたくらいの構造をとっております。それが、とりわけ足立区は色濃く残っているという指摘がされていたりします。23区の中でも、もしかしたら一番とう農村時代の名残が残っているのではないかと、といわれる所以でございます。そういうところで、村同士の繋がりとかが強く残る背景に、一つ水の問題があると言われております。地理的な特徴を、あとといいますと、やれ粘土質土壌だとかですね、いろいろあるんですけど、とりわけ水というのが非常に大きな問題、しかも洪水ではなくて、自分達の飲み水や農業用水に苦勞していると言う所です。井戸を掘って当時は水を得ているわけなんですけれども、西新井という地名はございませぬですね。西新井があつて東新井がないのではないかと、といつも言っているんですが、ないわけがございまして、由来が弘法大師さんが開いた井戸だ、それを新井という。では何で西があるんですか、と聞いたら本堂の西だからです。本当かな、と思うんですが、なるほど西新井の境内に行きますと弘法大師の井戸だという所がございまして。実際真実かどうかは別として、実際に水に苦勞していて、いい水が出るとそれが名所になっていく、という背景がございまして。江戸の人達も水には普段苦勞してまして、水道の水で産湯をつかったのが江戸っ子だと言われるくらい、掘っただけの井戸だと塩水が出て来てしまう。深井戸ではないと、なかなか出て来ないよ、という世界が広がっています。江戸の本来と変わらず足立の方もやはり水には苦勞していた。いい水だそうで、月代（さかやき）と言って江戸時代にこうカットしますけれども、スキンヘッドにするんですが、そこの所に塗ってみたり、目を洗ってみたり、当時の観光記録を見るといろいろなことを西新井でやっております。

続きまして足立全体の話でございまして、「葦立ち説」という有名な地名由来を揚げさせていただきます。実は、そこに書きましたが、江戸時代になって称えられた地名由来なんです。昔から言わた訳ではなくて、池田定常（松平定常）という、地名オタクの大名がいます。すごく好きなんです。江戸周辺の地名ってどうなんだどうなんだというのを、探っていた人なんですけど、足立郡という郡が、確かに足立区の一部なんですけど、この郡は、池や沼が多くて、葦が群生していますよ（「郡、池沼多し、蘆葦叢生けだし葦立ちの義」）

だから葦立ちだといった、というのが文献上確認できる一番古い「葦立ち説」です。本当に足立は何から由来されているのかというのは、実はわかりません。皆さん足立コンシェルジュというお名前でしたので、では、足立区の足立は何で付いているんだ、という葦立ちというのが一般的に言われているんで、その根拠というのをいっこ押さえておいた方がいいかなと思いましたので、ご紹介しました。私は石川県の金沢の出身なんですが、地名由来って、殆どははっきりしたものというのが残っていないというのが定説でございます。江戸博に竹内さんという館長さんがいるんですけども、その方々と一緒に東京の地名由来事典なんてという本を出させて頂いているんですが、その編集会議の時に、東京の地名何千とあるんですが、そのうち由来が本当にこれだとわかるのは1割から2割程度です。あとは殆どわかりません。何でそう付いたのか原因がわからない。練馬にしても多摩郡の多摩にしても、何でそう付いたのか、本当のところはよくわからない、といわれております。では何故地名由来がいっぱいあるか。ということになってくるのですが、因みに石川県の金沢はどういう地名由来なのか。もしかして私の話をさせていただいたのを聞いて頂いた方には二度・三度かもしれませんが、金沢ってこう書きますよね。江戸時代になってからの地名でございます。言うのはちょっと恥ずかしいんですが、芋掘り藤吾郎というお百姓がいて、その人がある沢で芋を洗っていたら砂金があった。それで、その砂金がある場所だから金沢だという、金沢市民は誰も信じていません。何でかという、金が取れたと言う記録が一切ないんですね。金箔工業が江戸時代になって盛んになって、それで金が集まっているものですから、金が取れたらろうというような俗説があります。そのあとの金沢という地名が、本当はどうも前田さんが入って来てから命名したようなんですけども、川が二つ流れておりますので、それで兼ねる沢から金沢というのが、どうもそうらしいんですけども、地名由来としては芋掘りの藤吾郎さんが砂金を見つけた沢があったから金沢だと、芋掘り藤吾郎饅頭とかですね、いろいろありますので金沢に行かれた説は是非お買い求め頂ければ、別にお菓子屋さんから何か貰っているわけではないんですが、そう思います。今金沢城の中には金城栄華という立派なお社まであるくらいです。何を私申し上げたいかといいますと、地名由来というのははっきりしたものではないのですが、その土地土地の社会的な事を後世に伝えたいために、いろいろなお話というのが作られてまいります。昔の歴史の伝え方の一つに、地名の由来があるというのを、ご紹介しようと思った次第です。この金沢という地名由来も金箔工業が盛んになった城下町文化を伝えるという意味では非常に面白い伝え方だなと、いうふうに思います。つまりこの点正確かどうかという視点でみてしまうと、全く意味を成さない話になってしまいます。ところが、地名由来は葦立ちもそうですね。江戸の人達にとってこの辺りに来ると葦原が広がっていたりするのが見えて来る。それでこういう低湿地だということがこの地域の特徴だよということが考えられて、そして葦立ちというふうな地名が付いて来た、と考えている。そういう土地の案内方法の一種だと思っていただければと思います。と申しますのは足立の本部というか古代から足立郡であるんですが、一番足立という地名が古くからあるのは

現在の大宮でございます。さいたま市の大宮、こういう低湿地の所ではなくてちょっと高くなった所なんですね。ですから本当に葦が立っていたかといわれると、いやーということになってしまうんですが、こういう地名由来があるということのご紹介と、一つ是非足立コンシェルジュ、葦立ち説というのが、たぶんご案内されるお客様や、それから足立区内の皆様をご案内なさる時に、押さえておいていただければな、と思います。

続きまして、歴史の本番に入っていきたいと思います。古代・中世でございます。

私、実は歴史をあまり得意としておりませんで、専門は江戸時代以降なものですから、半ば受け売りのような状況です。こちら、毛長川流域文化とさせていただきます。今日プリントの一番最後のところに、マップがありますが、そのマップで一番上の方、谷古田領とか伊興遺跡、舎人遺跡となっているところをご確認いただけますでしょうか。足立区の北辺を東西に流れている川なんです、毛長川と申します。足立区の北の方から足立区側を撮影した航空写真なんです、これが毛長川になります。ずっと毛長川が走っております。ここで綾瀬川と合流して下流に向かって行く。つまり北の方から、花畑の大鷲神社になるんですが、大鷲神社のさらに北の方からバーッと撮った感じになります。ここに花畑団地があって竹の塚の清掃工場が遠くに見えている。荒川がこっち側にありますよ。なんていう状況なんです、この川沿いが足立区内で陸地化が始まった最初の所でございます。徐々に北から南の方へ、先程もともと海だったと申し上げましたが、最初に陸地化が進んだ地域です。そこが歴史の足立区のいわゆる出発点になっております。マップの方でご覧頂いています様に、舎人遺跡があったり伊興遺跡だとか、そういう名前がつくように遺跡がずっとこの川沿いに分布しているというのが特長です。時代はいつかと申しますと、古墳時代が中心になります。縄文時代、弥生時代はそんなに出来来ないんですね、遺物は出て来るんですが住居址といって人が住んだおうちの跡までの発見には繋がっておりません。担当の学芸員によると、どうもこれは捨ててあったものかもしれない。上流から捨てたものが流れ着いたのかもしれないしよくわからない、ということです。はっきりと人が住みました、というのがわかるのが古墳時代以降になってまいります。水際生活といわれておりまして、いろいろなことをやっております。伊興遺跡の住居址です。こういう周りに排水用の溝があって、まあ1DKという寂しい掘っ建て小屋の住居址なんです、人の生活した跡が残っている。それから舎人遺跡なんかでは、どういう細工をしていたのか全くわからないんですが、フイゴの羽口というのが出てまいりました。鉄をバアアッとやるときの鞆ですね。鉄分の残滓がこの辺りの地方ではすごく残っていて、製鉄といっても端から鉄をやるのではなくて、一回使った鉄を再生でもしているんだらうか、という程度の構造の跡が出てまいります。そういう具合に、足立にも古墳時代には人が住み始めます。全くその時の記録というのは残っていないんですが、先程足立の地名由来をご紹介しましたが、では記録上ははっきり足立って出て来るのは何時だ、ということになると、次のスライドでご案内しますが、天平7年に足立郡から平城京の方に出されました木簡、その中に足立郡というのが登場いたします。こちらの方に天平7年（735年）に足立郡から

「土毛蓮子」を献上したということが記されたものが、平城京の中から出てまいりました。現物は文研といいまして、奈良の国立文化財研究所にあります。実は1万何千件というふうに出てきた、それを一個一個解読しているうちに一つあった。埼玉県の学芸員がそれを見付けてくれて、足立って出ていたよ。それは足立という地名が何時から使われていたかがわかる最初だね。なんていう話になった。735年という年なんです、足立の地名由来に結び付けていいねということになったのが、産物で蓮の実だったからなんですね。低湿地植物であると、足立郡は南北に長くて、一番南の端っこが私共の足立区。一番北の方が現在伊奈町といっていますけれども、埼玉県北足立郡伊奈町、東北新幹線や上越新幹線が通っている辺りになるんですが、そこまで南北に長い足立郡の中でも、低湿地として特長付けられるのが、こっちの方だろうということで、足立という地名が使われたのは何時からですかというご質問とかには、8世紀ですね。735年から出ていますよ。というふうにご案内しているところです。もう一つはですね、伊興遺跡から出て来たんですが、同じく8世紀のもので、何か馬に乗った人が走っている木簡というのが出てまいりました。よくわからないのですが、ここに人が乗っていて馬が書いてある、そういう木簡です。これが見つかって、やっぱりいろいろな人が住んでいて、中には馬に乗っていた人もいたんだね、なんていうことが言われております。足立区は幸いにしてタベタな土地というのが、利点が歴史の方だと一つあって、木製品が残り易いんです。非常に木製品が残り易い、つまりちょっと掘るとずっと水分が安定した地層が続いておりますので、物が腐らないんですよ。少なくとも木の物が腐らなくて残っているという特徴があります。当館にも東京都の文化財があるんですが、木製品が主になった当時の用具、祭祀用具だとか鍬だとかいろいろなものがあるんですが、湿った土の中で一定した温度と一定した湿度の中で保たれたために木製品が残り易いというのが、この辺りの特徴になっております。伊興遺跡の方に行かれると、こういった物をご覧いただけようかと思えます。場所は竹の塚駅からちょっと歩きますけれども、お時間がある時に是非行かれたらいいなと思えます。古代・中世に関してもう一つご紹介すると、区内にたくさん多いのが源氏の伝説です。どうもブームがあったようですね。あちこちでご案内の時に聞かれることが多いかと思えます。花畑の大鷲神社さんもそうですし、白旗塚という伊興の近くにありますが、あれは源氏の白旗を立てたから白旗塚、足立区六月という地名があるんですが、あの六月の八幡太郎義家さんが、六月の頃にやって来たから六月、あそこに炎天寺さんてございます。季節が炎天だから六月の炎天寺さんと言うんだそうなんですが、他にも梅田の明王院さんも源氏の伝説が伝わっております。あの前九年後三年の役という東北の反乱を鎮定するために、八幡さま、義家さまと新羅三郎義光が北へ向かって行った時に、戦勝祈願をしたのが、ここだというのが区内のあちこちにあるんですよ。本当に全部戦勝祈願をしていたら、殆ど身動きが取れないだろうと言う位ありまして、大鷲神社さんなんかもそうですね。八幡太郎が東北に行く時に戦勝祈願をここでしたんだ。南花畑に矢納弁天なんていうのがございまして、その時の源氏の弓がそのまま奉納されてます。千住の方にもございますですね。

区内各地南北にずっと残っています。本当に通ったかといわれると、よくわかりません。ただ皆さんですね、そういう由緒書きというのを作って人を呼ぼう、ということをやっています。足立、存外商魂逞しいところがございます、逸話とかエピソードをうまく作り上げてというか創作して、悪いことではないんですよ、そこに名所を作って人を呼ぶということをやっております。特に農閑期にそうです。なんでそうなったか、社会的な状況では、ここいら辺は將軍家のお鷹場になってしまいます。冬場は田んぼから水を一切落としてしまえ、という命令が来るんですね。耕作してはいけない、將軍さまが鷹狩をする時にダーッと走り回るから、農作物を作っては駄目よ、という時代が二百何十年間続きます。それで、その時には暮らしをどうするか、という問題が出て来ますので、その一環だろう、というふうに推定はされています。もしかしたら鷹狩ということが間違いで、八幡さまが通っていたかも知れません。ただそれは残念ながら資料が無くて判別できない。ということになっております。では、具体的にそう言った地名がもろに出てくる最初の資料は何時頃ですか、となりますと、実は時代はずっと下ります。吾妻鏡というのにも伊興というのが出て来るのですが、さすがに足立区で一番古いのはですね。他にずらっと出て来るようになるのはもう戦国時代になってからです。こちらの方に、「北条氏所領役帳」というのを下させて頂きました。内閣文庫という所に収まっているものなのですが、こちらの方の方ですね、下足立淵江、と書いてあります。場所はどこかという、今の本木周辺になります。それから沼田現在の足立区江北、伊興、保木間、寺住と書いてありますのは千住のようです。これは実は写しでございまして、千住の千ですね、千のくずしと寺のくずしを間違えて写したのではないかとされています。これが、三又というのが現在の千住曙町辺りで、川が三つ、荒川、綾瀬川、大川ですか、が合わさっている所と言われている。この時代になりますと、こういう、ただ見て頂いてわかるように、東淵江の方といえますか、こちらの方は殆ど出て来ません。それもその筈でございまして、まだ利根川沿岸の低湿地ということになっております。淵江城の復元想定図です。場所はどこかと言いますと、西新井橋がありまして、本木新道というのがずっと行ってあります。ここいら辺本木小学校なんてあるんですが、お城がらみの地名が随分残っております。出戸八幡というのがお城の出口だとか、小谷野口でね小谷集落というんですが、戦国時代の城下町特有の地名が付いている場所があったりします、千葉氏というのがその時のお殿様であるんですが、祈願所があったり、妙見社があったり、梅田の方には郷府、郷土博物館の郷に政府の府と書いて、郷府という地名が残っている。そういった所から、だいたいこの範囲がお城の範囲ではないかと推定されています。記録なんかにも出てまいりまして、実際に発掘したら出て来たということで、今、西新井橋から西新井のアリオに行く100号線と私達が呼んでいる尾竹橋通りというのがあるんですけども、そこに白元さんという防虫剤の会社、殺虫剤だとか、がございまして。その1階にそのビルを建て替える時にお城の跡が出て来て、堀の跡が出て来たものですから、そちらの1階に展示室があります。中から出て来た戦国時代の物が展示されております。ちょっと入り難いのですが、受付さんに言

いますと、どうぞ見て行って下さい、と言ってくれますので、西新井橋の近所に行かれる方がいらっしゃいましたらばですね、ただ平日しかやっておりません。もちろん休みの日は会社自体が閉まっておりますので、開いていないんですけども、1階ロビーに展示室があるという場所がございますので、行ってみられると戦国時代の事がチラッと、足立も戦国時代があったんだな、というのが見えようかと思います。

江戸時代に入ったのですが、

東側の方が殆ど地名が出て来ない、というのは江戸時代に入ってから開かれた所なんですね。ずっとここに黒く書いてあるのが足立区の東の方なんですけど、特にこの黒い所、これ全部江戸時代の初めに作られた村です。江戸時代のニュータウンになってまいります。河合平内、今も同姓同名の方がいらっしゃいますんで言いにくいんですが、佐野さん、河合さん、星野さん、天野さん、後で展示室でご案内しますが、こういう人達がもともと江戸時代の丁度初めころ、戦国合戦が終わる頃、大坂の陣というのがあるんですが、あの時代に、徳川から農民達を集めて、もう本当に開発が難しい土地に入植していいよ、という許可証を出します。許可証を出して、新田開発というのを一気にいきます。私も実は、大学時代足立区のある字も知らなかったんですが、歴史の専門の方の教科書で始めて足立区を知ったんです。これだけ集まって入植者がいるところとして、いろいろな歴史の本に紹介されています。それで初めて知りました。一大特徴になっています。元々川の氾濫原野だった所を一気に町を作っていく。ということが行われて登場します。それで、出来上がった村がどんな村だったかという、後で現物がありますので、ギャラリートークでご案内しますが、水田農村です。2万石の石高になります。江戸時代は大体2万石、一時期2万5千石まで伸びるんですが、不安定だったようで、2万石で安定します。こちらの写真は、奥の方の森が大鷲神社で、手前の方が水田になっているんですが、ずっと田んぼを作っているという地域でございます。ただ水は先程も申し上げましたように、非常に苦労されています。用水を引っ張っているのですが、ではそこで作られていたお米がどういふものかというのを調べますと、こういう資料が出てまいります。「武州米会所格付表」で江戸東京博物館に入っているんですが、全部で25ランク、江戸のお米の取引では使われております。この25ランクの見方なのですが、こっち(右)から1ランク、2ランク、3ランク、4ランクという具合に、この四角く囲んであるのがそのクラスを表しております。では足立のお米はどの位かという、プリントの方に書きましたが、存外高いんですね。全25ランク中第3ランクでございます。これはいい米を作っていたんだなあ、と感動したんですが、そしたらお米の取引の専門家から違うよ、と言われました。どういうことですか、と聞いたら、江戸時代物を運ぶのに、俵と船でございます。距離が長ければ長い程運賃がかかって高くなってしまいます。それから冷蔵輸送、コンテナ輸送の時代ではありませんので、距離が遠いとそれだけ日照りがあって温度が上昇したり、海を使って廻船で持って来る場合には、塩水をかぶってしまう可能性がある。そういうことで、遠距離米な

ら遠距離米になるほど格は落ちていく、もしかしてコシヒカリとおもったんですが、そういう食味のいい感じというよりも、安定して江戸に出すことが出来て、しかも運送賃がかからない、そういうお米だからいいランクが付く。ちょっとがっかりしてしまいました。因みに私の出身地である加賀加州米は第21ランクとか、その辺りにランクされております。外に野菜生産が非常に有名になりまして、いろいろと作られております。ここの部分は下の展示室で後程フィールドワークの後、ご案内したいというふうに思っております。典型的なのが、野菜だけでなく、江戸との循環でございます。江戸で出た物をこちらで作り直してまた江戸に出荷するという、地域の特性がございます。これは、千住でございます横山家住宅でございます。旧道をずっと、駅を降りてから北の荒川の方に行きますと、あるお家なんですけれども、なんのお家かと申しますと紙問屋さんでございます。どうしてかな、ということになるんですが、江戸で出た、一回使った紙を足立の辺りの農家が、特に冬場、先程申し上げました様に、冬場はちょっと仕事が無くなりますので、その時に漉返して、今風に言えばリサイクルペーパーを作って、また江戸に出荷している、そういう取引をやった松屋さんという、字漉き紙問屋さんになります。もう一つは、江戸で出たうんちやおしっこを、こちらに持って来て肥料として使って、野菜などが典型ですけれども、野菜やお米という産物にして江戸に送り返す。そういう江戸東京との循環というのがずっと行われていた地域でもあります。そのために、非常に商魂逞しい農家が多数登場しております。替わりに出荷組合が殆ど無いんですよ。何と、普通農村調査なんてやりますと、出荷組合があつて皆で纏まって出荷していますなんていうのが出て来るのですが、知り合い同士で出荷組合を作って出すというのはあるんですが、足立区全体で纏まって出しているということが殆どございませぬ。江戸東京の流行を見据えながら、何が今売れているんだろうか、というのを考えながら作って売って行くと言うことをずっと続けている、そういう特徴が足立区内にございます。今その千住宿をご紹介いたしましたけれども、千住宿模型、今シアター1010にありますので、是非ご覧頂きたいですけれども、昔当館にございました。千住のものは千住に持って行け、という宿題を頂きまして、今千住のシアターの方にありますけれども、千住宿の町並みがここに出ております。宿場というふうにご案内したんですが、そうやって今松屋さんで典型的な横山家住宅、問屋さんでございました。問屋さんが何で残っているんだ、という話になるんですが、千住宿で一番多いのが問屋さんなんです。旅籠というイメージが宿場の場合はございます。宿場町という旅籠というイメージがあるんですが、江戸と近場にあった千住宿は、一番多いのが問屋さんでございました。こちら江戸の四宿（ししゅく）と申しますが、日光道中の千住宿、東海道品川の品川、甲州道中の新宿、中仙道の板橋宿、この四つの宿場を江戸の宿場四宿、江戸四宿と呼びますけれども、その中で千住宿は人口規模で申しますと一番多いんです。人数でいいますと、千住は人口9,956、品川が6,890、新宿と板橋、現在の新宿と板橋になりますけれども、2,300と2,400でございますので、千住宿がいかにかいか、わかると思います。ただ、それでは旅籠の数とか見て頂くと、エッと思われると

思います。品川がやっぱりトップなんですね。東海道品川宿という位で、そうなんですが、千住宿の場合55件、品川よりも人口が多いのに旅籠の数が少ないということになります。本陣の数も、品川は脇本陣を二つ抱えて合計三つあるんですが、千住の場合は本陣と脇本陣が一つずつあるだけ。ではこの人口の6,800対9,900の比較の一番大きな所は何かと申しますと、問屋さんの数が非常に多いということになります。流通の町なんですね。千住やっちゃ場というのが今でも残っておりますが、今の名前が残っておりますけれども、流通の為の問屋さん。それが非常に多くて、町の特徴としてその流通の問屋さんの蔵が今も残っている。ということになってきます。ただ、問屋さんの目の前が取引場所になりますので、蔵自体はバックして後ろの方に出来ている、という特徴がございます。そのあたりの千住のシアターの所の模型なんかで、表現されておりますので、ご覧いただければなというふうに思います。宿場という、弥次さん喜多さんの絵もちょっと入れておきましたけれども、ここでも商家が建ち並んでいる様子が描かれております。千住、宿場というイメージがあるんですが、実質の所は流通の為の町というのが一番大きい特徴になっております。

さて、こうやって、古代中世から江戸時代までずっと駆け足で今見て参りました。この後で常設展示の所でもお話させて頂こうと思うのですが、町の足立の歴史の特徴とか観光案内とか史跡巡りでもそうですし、いろいろなもので、そうなんですが、こういった歴史を紡ぐような話が町の中に散在しているという状況です。この後フィールドワークに行きますけれども、パッと町並みを見ただけだと、その特徴ある所が纏まってあるということはありません。古代の特徴があるものがあったり、中世の特徴があるものがあったり、江戸時代の特徴があるものが残っていたり、はたまた、いかにも現代風な特徴があるものがあったりというのが、モザイク状に存在しているというのがこの地域の特徴の一つです。文化施設なんかを作る仕事をしたりするランナーといわれる人がいるんですけども、足立へ来ると何か錯覚を起こす、というんですね。どういう錯覚ですかと聞いたならば、フィールドワークの途中である農家に行った。そこの農家で調査をさせて貰っている時に、あれ、ここ東京23区、江戸時代そのままではないかと、ふと、そこから町を一步外へ出ると、都営住宅があったり、マンションがあったりする。ああ、これって人口急増期の高度成長期の特徴だよ、何て思う。かと思つて少し歩いて行くと、遺跡の公園があります。何が何だかわからなくなる、何か錯覚を起こす、と言うんですね。重層複合的にというふうにその人は表現してはいましたけれども、歴史が積み重なってそれがモザイク状に点在しているというのが特徴である。というようなことをおっしゃっていました。ということで、今非常に駆け足で江戸時代までやってみました。これを一回で理解するのは到底できる按配のものでもないんですけども、大雑把に申しあげまして足立区、元々農村としてスタートして農村と宿場で反映した時代までのことをガッツと今お話させていただきました。

ということで、後半の14時半に近づいてまいりましたので、一旦休憩に入ります。40

分まで休憩を取りたいと思います。それでこちらから出発をして、佐野いこいの森の方まで、柳野稲荷神社というところにも寄りたいと思っておりますが、その二箇所を回って、博物館に戻って来る。というふうに思います。で、トイレが無いので10分の間に用をお済ませていただきたい。……

添田会長からの繰り返しの休憩説明の後、10分休憩の後、フィールドワーク（記録なし）

いろいろなものがミックスして残っている、というのが足立の町の特徴の一つになっている。平井さんというプランナーの方が、いろいろと町の様子を見ていて本当にモザイクですね。それと、もう一つあるのが地元のことだけではなくて、さっき、添田さんと話ながら歩いていたんですが、僕自身もそうですが、いろいろな地域のご出身の方が集まっているということから、また独特の文化が出来てくるんだな、というのが見えて参ります。今日これから、ちょっと予定を組替えて、折角いい話も聞けましたので、近現代のおさらいを少しして、それからギャラリートークをさせていただいて、メにしたいな、というふうに思っています。丁度外で身体を動かしてきたんで寝てしまいそうな雰囲気もありますが、暖かくなりましたので、もうちょっと頑張ってもらって、最後まで持って行きたいと思いません。というのも私、研修で寝るのが得意でございまして、よく上司に叱られてしまいます。足立区役所に入るとやはり研修があるんです。区の職員としてはこれをやってはいけない、あれをやってはいけない、こうあるべきだ、みたいなですね。それで研修に出ているとどうしても眠くなって来て、最後は寝てしまう。足立区役所の公用車にはドライブレコーダーというのが付いておりまして、タクシーさんなんかと同じですが、走行状態とかを記録されている。私よく、一昨日1日運転していたんですが、いろいろな所に資料借用とかの下交渉したりしに行ったのですが、そのたびにブレーキを踏んでは危険運転ですと言われて。言われているいろいろあれするもなんですが、今日も講座という名前が付いておりますので、ただ聞くだけではなくて、現地を歩いていろいろと話を伺うというのも面白いなと思います。実は調査する時の醍醐味でもございまして、今日は宮村さんというインタープリターの方、植物専門なんですね。自然専門の方で、自然教育研究センターという株式会社になっているんですが、東京のあちこちで、自然関係の仕事をやっているらしいです。植物学の方で随分論文とかも書いていらっしゃる若手の方なんですが、お話を伺うと、佐野の林って佐野いこいの森ってこんなものなんだというのが良くわかります。それと、ご参加の皆様から、さるのこしかけが癌に効く、実は家の母が昭和4年生まれなんですが、ちょっと癌を患って、これは送った方がいいかなと思って、たださほどご心配いただかなくても80歳にいらっしゃいますので、殆ど転移がない。というような状況でございまして、これは一発送ってみようかなとか、いろいろと考えた次第です。こういった現地に行ってわかることって結構多いんですよ。博物館の展示を偉そうにして、これがこうで、これがこうじゃと言っているんですが、殆どが現地に行って教えて頂いた

事ばかりでございます。例えば足立区役所成立の頃って、近現代の話なんです、区の記録なんて当てにならなくて、写真を見ながら現地に行ってお話を伺うということがメインになって参ります。例えば今、東京藝術センターが建っている足立区、昔の足立区役所でございます。その前身は南足立郡役所という時代なんですけれども、その頃都電が通ったりそういうことをしています。私、当然とってはあれですが、平成に入ってから足立区へ来た人間でございますので、都電がそこを走っていたことなんて、見たこともないわけですね。では、どういうふうになっていたのかというのは地元の方からお話を伺って話を組み立てていくということになります。例えば丁度その頃農業区でした、戦前農村でした。田んぼや畑が広がっていて、というのも、古い写真は何件かこうやって残っているわけなんです、この写真を持ちながら地元の方にお話を伺っていくというのが基本になっております。

このスライドの方に、足立区は農業区だった。という言い方も当時の文献でも出て来ますが、地元の方の話を伺っていると、それこそ島根町会の方、役員風のずらっと並んでいる人達、昔農家だった方が多いんですよ。町会の幹部の方、そうすると島根町会って変な話なんです、部がありまし班がありまして、その下に組があるんですね。その組長、別にやくぎではないんですが、ちょっと一回やったことがあるんですが、その時に集まりなんか部の中であると、昔この辺りはどうでした、なんてついでに伺うと、田んぼばかりだったよ、とかよく出てきます。そういう町並みの様子が、こういう上の方の足立区内だということはよくわかっているんですが、水田が一面に広がっている、という様子です。さっきの紙漉き問屋なんかもありましたから、紙漉き農家の写真なんていうのも残っておりますし、下の方はお大師様の写真なんです、回りには水田地帯がバーッと広がっている。東武線がこう入っていて、参道があつてお大師がある、という感じになっているんですけれども、田園風景の中にお大師さんが建っている。田山花袋という人は、大正時代にこの辺りに来て記録というか紀行文を残しているんですが、田んぼの中に建っている伽藍が目立つ所だ、東京とはいいいながら、埼玉のものと同じだよふうに書いています。田山花袋という方、館林とかあっちの方の出身、関東農村、埼玉の方の農村に非常に親しんだ方ということで、記述を残していらっしゃいます。こういう東京農村だったのが、本当に荒川から北、こう一面農村地帯だったというのが、足立区の昭和の初めの様子です。それで、市街地化の兆しというのが、昭和の初めに起こりまして、現在の本木、関原、梅田という辺りからどんどん家が建て込んで参ります。こちら、本木新道という道なんですけれども、ご覧いただきますと、町屋風の家の中に萱葺の農家がポッと見えたりする。農村の中に市街地がグッと入り込んで来るという、ここでも既にモザイクが始まっております。農村と町場がミックスしている。そういう状況が昭和の初めに始まりました。市街地化は千住から始まりまして、徐々に徐々に荒川の北の方へ広がっていくという様子です。これが昭和の初めに発生して、人口増が始まっていく、という状況に変わります。それでも、昭和の初めとか明治時代とかまででいうとまだ農村地帯です。これは、梅島村という村が

成立した時の記録をなぞったんですが、梅島村の村税というのが残ってしまっていて、まだまだ農業でいきますよと、明治時代を迎えても「思うに本村たる由来、農を以って村是とし」という言葉が残っているんですね。農業地帯として、いきますよというのが明治の終わり頃にもまだ唱えている。ただ、昭和に入ってしまうと、市街地化がどんどん進んで行くというのが当時の状況です。ただ、村税の伝統です、いろいろな物が作られます。名品の産出というのがありまして、今でも作られておりますけれども、千住葱が区内各地で生産されております。それから江戸時代から続く稲ですね。それと山東菜って皆さんご存知でしょうか。正月の漬物でできる白菜とはちょっと違うんですけれども、今も農地を見ると、偶に植わっています。栗原の山東菜なんてという非常に有名なんですけれども、正月のお漬物に使う白菜に似た野菜です。それとか上の方にチューリップがありますけれども、足立区の区の花ってチューリップなんですね。戦前からチューリップ栽培が盛んで、今は富山に取られちゃっていますけれども、この辺り市街地かが進みましましたので、変わりましたが、昭和の戦前からチューリップが盛んでした。あとは、ツマモノの栽培、刺身の青紫蘇といったものを作ったりすることに、昭和の初めから昭和40年位までずっと消費産地として続いています。従いまして農村地帯というのはそんなに遠いはずではございません。つい最近まで続いていると言ってしまうのは過言ではないというふうに思います。ところが、人口急増があって区画整理が盛んに行われます。後で、展示室の方でもご案内しますが、足立区の北の方、殆どが区画整理区域になっております。農村時代からの大改造が昭和40年代以降盛んに行われるようになって参ります。そして、今の町並みになって来るんですが、たまたま航空写真で三つ写りこんでいる写真というのが昭和44年頃にありましたんでピックアップしました。場所はどこかといいますと、こっちの地図でいいますとこの辺り、ここが国道4号線、水神橋とって草加との境の所がございます。上の方に見えるのが花畑団地、そして南の方は保木間、花畑から保木間にかけての所なんです、これまだ農村時代の状況なんですね。クネクネと曲がった道があつて田んぼがあつて、それを区画整理して、道を真っ直ぐにして、そして団地が建って、こういう大改造が昭和40年代ずっと行われていくような形になってまいります。たまたま三つが写りこんでいる写真だったので、利用させて頂いたんですが、一番多いのが足立区で施行された区画整理なんです、組合施行というタイトルで、何かというと、地元の人達で組合を作って、道路を作って、宅地を作って、町を改造するというやり方です。実はこの郷土博物館が建っているこの敷地も区画整理地内の公有地、公有地部分を博物館にしている、ということになります。土地を皆な少しずつ出し合うんですね。出し合ってやる形なものですから、しかも行政がやるタイプではございません。組合を作って地元の人達がやる。偉そうに今その区道がというんですが、維持管理は今区が行っていますが、建設時は区は全然お金を払っているわけではないんですよ。ではよくもまあ、こんな無償提供なんかしますね。という話をするんですが、そこで返ってくる応えは、区画整理をしていると、地価がまず騰がります。住宅地としての機能は高くなりますので騰がる。しかも丁度やった時が高度成長期だ

ったので、区画整理して自分の土地が減ったところで増収になっている。そういう時代背景もあり、さらに東京の住宅難という大問題が背景にあったところから、区画整理がどんどん進みました。23区では足立区が一番区画整理が、組合施行が多いという特徴があります。というところで、後にご存知の通りです。団地、学校の建設が一気に進んでまいります。花畑団地の写真がありますけれども、2,597個という大所帯の団地です。また、北三谷小学校なんて小学校が1年に5校ずつ開校していくなんていう、非常にダイナミックな時代が昭和時代のお話になって参ります。後は都電とか交通が盛んになってという、ここから先はもう皆さんかなりご承知のとおりのところですよ。昭和43年には都電が廃止されて、今度は地下鉄が直通していく、そういう流れで、現代に至っているわけなんですけれども、後で展示室に行って具体的なお話をさせて頂こうかなというふうに思います。今、私昭和時代、昭和時代と連呼しました。実はですね、展示室でもお話するんですが、当館に今、年間2万7千から3万人の間のお客様がご来館になるんですが、半分が小中学生がのお子様になります。小学校の副読本で今、昔の暮らしってどこの時代をやっていると思われませんか。昭和40年です。小学校の社会科部会の先生とかとお話することがあるんですが、昔の暮らしという別の本があるんですね。参考図書なんかあるんですが、そこでやっている話というのは昭和40年、何でそんなに新しいんだと思われるかもしれないのですが、昭和40年でも実は限界に近い状態です。今平成で20年経ちました。平成21年でございます。現時点から、平成21年、2009年から昭和40年前後、1965年、この間というのはもう40年以上経ってしまね。44年位ですか。今、小学校のお友達が10歳だとしますね。小学校3年生・4年生がメインになりますので10歳だとして、丁度2000年位に生まれています。生まれた年から35年引いた時を皆さん想像してみてください、と言われました。僕は因みに昭和38年生まれなんで、38年から35を引くと昭和初期なんですよ。確かに、感覚として小学生が勉強できる限界ってその辺りです。明治時代の復元家屋とか、今都営住宅が設定されている年代が昭和39年なのは、そういう理由なんですね。うちのメインのお客様がそういうお子様達になりますので、親が子供に伝えられる限界がその辺りにあります。江戸時代とか古代の話を見せて頂いたんですが、もしコンシェルジュの皆様がお子様を対象とされる場合、どの辺りをターゲットにしたらいいかという、大体昭和40年代と思って頂ければ、それでも十分に昔の暮らしです。僕もちょっと以外だったんですが、アンケートとか統計とかいろんな調査からそれが今だいたい該当してきます。

では、明治・大正はどうなんだ、という話になるんですが、明治・大正時代だと、奈良・平安と変わらないというんですよ。もうそういう段階に来ておまして、今日は復元家屋の上にあがって頂きますが、一生懸命ダイアル式の黒電話のボタンを押していました。小学生が一生懸命押していました。パソコンも無い、携帯電話も無い、テレビだって室内アンテナだよ、という状況なのですが、室内アンテナ自体がもうわからないですね。ということで、ご案内の対象にも小学生が入っていたら、という想定なんですね。現代史を

今やらせて頂いたのは、彼らにとってはこれが限界だよ、というところをちょっとお話ししておこうかなと思いました。特に親御さんと一緒に来る子、ということになりますと、丁度僕よりちょっと若い位の世代が親になります。そうしますと、その親が理解できないと、子供の理解にはなかなか繋がっていかない、というネックがありまして、当館の展示室の解説部分にも昭和時代という言葉が入っております。今、教科書にも昭和時代という言葉が入っているんです。彼等は生まれたのがもう平成ですから、昭和は歴史で勉強する時代になっている、というその辺をコンシェルジュの皆さんには認識して頂いて、現場にいる職員としてはそういうふうに、日々感じますので、どうぞ、カリキュラムなんかを組んで頂ければと思ってお判断した次第です。

展示室の方に実際に行ってみたくと思います。最初に、普段開けていないんですけども、実際に展示室の上にあがって頂きたいと思しますので、どうぞメモくらいをご用意頂いて、ご覧頂きたいと思します。

郷土博物館 2階の昭和40年代のモデル住宅や、1階の展示室を見学。

質疑応答

お疲れ様でした。今日1時半から5時までということで、他の講座もそうなんですか。企画者の皆さんは凄い濃い方々なので引張られるのかと思いますが、ということで、本日私が承ったお題につきましては以上のように雑駁な話でもうしわけないんですが、以上でございませう。それでですね、ご質問を纏めて今の時間お受けしながらディスカッションしようと思っております、いかがでしょうか、今日一連のご案内をさせて頂きました。あれはどうなっているのか、此処まで来るのに疲れるけれども他の方法はないの、昼を食べるのはどこか、といったことでも結構ですので、いかがでございませうか。

先程ポイントをついた説明があつて非常によくわかりました。足立区の成り立ちがわかったんですが、子供達が5割ここを使っている。私共も含めて、これからの足立区というところでの、例えば足立区って資源があまり無い、みたいなことをいわれるんだけれども、これからもっと足立区を豊かな町にするための、考え方とかあるいは計画とかビジョンとか、というものの展示をという、郷土博物館というもののイメージが過去みたいなイメージがしてしまう所もね、もうちょっとワンルームぐらい何か未来を感じさせるような物を置く考えはないのか。

こちらの館では郷土の歴史と文化に限定しています。一つが、これからの足立区像とかも踏まえて、とうことあるんですけども、実は前に未来に向けて、みたいな展示コーナーがあった時代があるんですよ。ただ、ご覧の通り、展示空間が600㎡ぐらいなんです。それで、すべてのことがいえるかというと、古代・中世ご覧の通り実はないんですよ。古代・中世も伊興遺跡講演があるから、そっちで見て貰いませうよ。ということで分担

しています。未来の関係でいうと、実は、ペーパーレベルでしか当館ではやっておりません。とりわけやっているのが、実は今博物館側が需要的に皆さんとやっていきたいというのが、このコンシェルジュも一緒にやらせていただいたのは、その一つなんですけれども、いろいろな面で、人的資源を使いながら一緒にやっとう。ということで、13団体当館では登録していただいております。ああやって古文書とか並んでいるのですが、あれの整理とか、実は専門の職員が私を含めて5名しかおりません。私、古文書とか請負を担当しているんですね。もう一人がお祭りだとか、習俗とか民族関係で、2名で後は非常勤が3名いらっしゃるんですが、未来に向けて当館で見えている一番の直近の事が、実は緊急避難で、出てくる資料をどうやって保存していくのか、というのが緊急の課題になっています。とりわけ大きいのは、今、筑波エクスプレスと日舎ライナーが開通したことで、旧家の解体とかが盛んなんですね。年間数千点から数万点の資料が保存できなくなって当館に押し寄せて来る。という状態になっています。それを小学校の余裕教室とかを借りながら整理するんですが、整理するスタッフがいらない。ねらい目なのが団塊の世代、初級考古学講座などをやりながら、資料整理ボランティアなどを実はやらせていただいております。一緒に古文書を整理しませんかとか、何が楽しいのかわからないんですが、埃まみれになりながら、やったださる方を募集しながら、一緒にやっとうということが、当館としての未来ビジョンになっております。未来ビジョンが実際に効を發揮して、さっきやっちゃん場の様子を見ていただきましたが、一緒に古文書が蔵からドサッと出て来ました。その整理は殆どボランティアの皆さんで、整理させていただいております。未来ビジョン、当館も区全体もそういう動きなんですね。足立区はご存知のように貧乏区でございます。千代田区とか、中央区、世田谷区で上がった税金がこっちへ導入される、という区です。納税世帯と給付世帯とが半々位なんですね。これが足立区の現状でございます。区全体としても、もうやっとういけない、皆で一緒にやろうよ、というのが未来ビジョンになっています。実は巧妙を見出しているのは、私共、古文書は専門家の物という意識は持っておりません。いろいろな方と一緒にやっとう、というのがメインで、実際にそれで整理が進んでいます。やっちゃん場のお記録なんて、岡本文書という形になるんですが、千住河原町の岡本さんというお方からご了解を頂いて、実際に整理するのはボランティアの皆さん、私達も一緒に入って、これは何って読むんだらうね、とか言いながら整理をしているというのが現状です。未来ビジョンとして一番見えているのは、人的資源がないかということ、あるなあ、というのが正直いって実感です。さっき佐野いこいの森でいらっしゃる自然教育研究センターの株式会社なんですが、そのスタッフの方と一緒にやっとういた西山さんという方もボランティアの方々です。場合によっては区のやり方として二つ、有償ボランティアなどという言葉がございますけれども、そういう形で進んで行くのが未来ビジョンになっております。それを展示するのが当館ではなくて、NPO活動支援センターなどが今メインを担っております。あと区役所自体ですね、そういうビジョンをお出ししながら、というんですが、殆どがペーパーレベルだったり、また、インターネット領域であつたり、

という形で展示空間としては、実の所計画とはございません。

宮地さんの博士満期退学についての質問は省略しました。

郷土資料館というのは、この郷土博物館がメインというので、さっきの説明の中にもあったんですけども、だんだん月日が経って移り変わっていきますが、その中で、元々の基本的な展示物というか、新たな展示物の移り変わりとかの経過を説明する、何かこう、移り変わりについての保存をどうされるのか。

資料は基本的に当博物館と、もう一つ文化財係と、二つの係で保存しております。保存が本当に今難しくなってきたのが、収蔵庫がほぼ満杯です。一部については区の他の施設に移して保存をするというのが存分に増えている。開館時には余裕湯があった収蔵庫も今はほぼ満杯で、そしてさらに昭和時代まで対象になって来ますとさらに増えて来る。さらに江戸時代の古文書も意外と発見されている。ということで、今私共が区の中で業務としてやっているものの一つが、新しい収蔵施設の整備というのをお願いしています。そうしないとですね、捨てるわけにはいかない。正直言って捨てるを得ない状態で来たものの中には有るんですね、旧家の解体なんて直ぐに行われますので、全部取り敢えず持って行って、持って行ってその中から廃棄しなければいけない物をそっちで廃棄してください、というものが半ば合わさって来るような状態です。そうしますとその取捨選択が行われますから、かなり絞ってはいるんですけども、それでも尚且つ収蔵スペースが足りない、というのが現状で、今小学校が統廃合された所、それから区のもう使わなくなった施設が収蔵施設のブランチとして、今機能しております。それが現状で、博物館資料って、減ることがないんですね。増えていくばかり、そことのせめぎ合いというのが業務の半数近くを占めているのが現状です。グチを言っているようで申し訳ないんですが、正直愚痴なんです。例えば千住の歴史を現す上で貴重な資料群だ、これは何とかだ、いうのがどンドンどンドン増えているのが現状で、とうとう収蔵庫では追い付かず、実は敷地内に一つプレハブで建てました。あと二箇所ぐらい、今施設が残っている、出ているという状態です。ただ、それ悪いことなのかなと思ってはいたんですが、いいことだなと正直思っています。ここまで集まって来る自治体、実は荒川の収蔵庫や葛飾の収蔵庫は、ここまで満杯になっていないんですよ。幸いにして足立区は開発が遅かった関係で、よく残っているのだ、とおもっております。収蔵については、そういう、建築物も例えばここに千住4丁目の山車というのがあるんですね。あれを解体して無くしたのは、あれはお雛様と一緒にお祭りの度に組上げて、お祭りの度に痛んだ所を補修して解体する。そういう慣わしだったので、20年間立ちっ放しになっていたのも、荷重がかかって痛んでしまったんですよ。それと解体技術が伝承されなかった、ということで、この前解体をやって本当にラッキーでした。そういう形で、基本的に来た物というのは、来て収蔵した以上は、とって置く、というのが前提になっています。

ピンポン。丁度時間です。

5時になりました。まだまだ多田さんにはいろいろとお聞きしたいことが沢山あると思うんですが、これからも足立区のことは多田さんに聞け、ということで、タダで聞かせて貰える。というわけで、気持ちは十分にお払いしたいと思います。

そういうわけで、また、第2講、第3講、第4講までありますので、是非皆さん参加頂いて、足立のことを学んで、そして、その中から我々はいったい何ができるのか、ということに考えを進めていく、ということで、足立が楽しい暮らしの場なのではなかろうかと思っております。それと、我々の事業の一つとして、料理教室とかもやっております。お仲間作りで恐縮です。お配りしてあるのがあるかと思えます。12月20日にありますので、ちょっと遊んでみよう、腕を磨いてみようと言う方は、是非参加いただければと思います。また、その後もPCの教室とかもやって行きますし、人生の話が今日出ましたけれども、文化の話だけではなくて、因みに僕が聞いたところだと、多田さんは足立区である第一号だそうですね。男性が足立区役所で育児休暇を取得した第一号ということで、要するにきちんと生活者をやっている学者で、偉いと思います。そういうわけで、これからも是非協力関係を持って、我々にいろいろなことを教えていただきますよう。お願いいたしました、お礼の拍手で終わりたいと思います。今日は長い間お疲れ様でした。これからも反省をしてより快適な講義にしていきたいと思えます。